

# わたしの「さくら」追憶記

koberyo1

わたしは幼いころから特別な思いで「桜の花」をみてきた。  
ともに人生を歩んできた、そんな思いをもってきた。  
その時々を思いをふりかえってみたい。

昭和8年、国定教科書が色刷りになり、「さいたさいたさくらがさいた」が載った、いわゆる「さくら読本」となった。わたしが意識して「さくら」をみたのは、この時になる。

当時、小学生一年生のころだった。さくらの花をはじめて心に刻んだことを覚えている。

それから、わたしが通っていたH小学校に桜の木があった。わたしの記憶では八重桜だった。花の開花とほぼ同時期に葉が揃っていたと思う。

春にいつも桜の花をみることができたし、桜の木のまえに平均台というか遊具をならべてあったので、それにしがみつきながら「さくら」をみていた。

また塾のT先生のお宅の南にひらいた窓からは、遠くの白く淡いかたまりをみた。先生は「あれは桜だよ」と教えてくれたが、まだ小さかったせい、その時はいま一つピン、とこなかった。

翌年から塾生が増加するにともない、遠足をするようになった。杉並の「大宮公園」の裏手に近い丘で、みんなでお弁当をひろげているときだった。

ふと遠くをみたとき、白くぼんやりとけむる色彩をみた。先生はあれは、「桜だよ」と指さして教えてくれたことを思いだしている。

風は少々、冷たかったが、春の陽射しがまぶしかった。

また小学生のころ、上野公園の科学博物館や動物園に足をはこんだことも思い出した。そもそも上野の山は、東京でも有名な「さくら」の名所だったのである。

その後、「早実」に入学し、そこで一本の桜の老木をみる。この木は校庭の南東にあった。兵器庫の手前だったので、このときわたしのなかで「桜」と「軍事」のイメージが結びついてしまった。

それからはいよいよ世の中は軍靴の音が響くようになる。体操の時間は教練と称し、

「銃剣」の訓練をするようになった。銃剣は三十分もやれば汗が顔からしたたり落ちた。

合宿では、「行軍」と称して長時間、歩いた。富士の裾野の教練合宿ではゲートルを足に巻き、「万朶の桜か襟の色 花は吉野に嵐吹く 大和男子と生まれなば 散兵堯の花と散れ」と教官のうたう軍歌の節のあわせて歌った。早実でも桜を心に刻んだのだった。

その後、甲種飛行練習生を受験して海軍生活に入ったが、多忙のあまり、桜のことは忘れていた。だが、ふとしたことで桜の花と再会することになる。

久里浜の通信学校（現在の防衛大学）の近所に衣笠山という公園がある。予科練の卒業時にここの桜に出会うのである。

ここの桜は、日露戦争戦勝記念で植えられたもので、それは立派な桜であったと記憶している。

このとき、はじめて桜にはいろいろな種類があることを教えられた。この公園のあった樹は、たしか「ソメイヨシノ」ではなかったかと思っている。あの凜、とした、いくつもの蕾がすばらしい。もっと桜のことを知りたいな、と思った。

その後、終戦となった。また同じように春がきて、桜は咲いてくれた。

母の実家のリンゴ畑には、となりの畑の境界の目印として桜の樹を植えていた。そこは少々、小高くなっていて春には桜の花とリンゴの花と同時に咲く。それはこの世のものとは思えないような光景で、わたしは幸福感を感じた。

これらの花々の下に死去したら埋めてもらいたい、と思ったものだ。死後も春には桜とリンゴの花をみることができたなら嬉しいではないか。また薔薇がかおるその場所は、じつに特別なところだった。ポカポカとした陽射しを浴び、寝転びながら春の別世界に酔いしれるのである。

それと弘前には歴史的にも有名な弘前城の桜を忘れてはならない。雪からさめた春の絵本がそこにはある。

桜の老木の数も三千本を超えるそうで、ソメイヨシノが一斉に花を咲かせる。そして絢爛豪華な花のトンネルができあがるのである。

かたやお城の松の老木は、春夏秋冬、季節のうつろいに変わりなく緑のままで、その色を変えることはない。

この緑はじつに鮮やかだった。桜とは対照的な存在感であり、コダマとでもいおうか、特別な精神が息づくようだった。わたしのは文学的な表現力がないので、上手にそれがなんであるか、表現できないのだが、ただそのように感じとれればよい、と思ったりしている。

思えば桜とは不思議な花である。こうした感興をを抱くのは、なにもわたしだけではない。日本人は古くから様々な思いを桜に対し、もってきた。桜は日本人の暮らしに深くかかわってきた。ご馳走をつくり、花見をこよなく愛してきた。

歴史的にも文学のもととなり、美術においても絵画化された。日本人の美意識は桜に集約されているとって過言ではないのである。